OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	属性抽出語「のような・らしい・っぽい」の一考察 : 修飾表現を中心に
Author(s)	黄, 愛玲
Citation	大阪大学言語文化学. 1997, 6, p. 33-45
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78090
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

属性抽出語「のような・らしい・っぽい」の一考察

—修飾表現を中心に— *

黄　愛玲 **

日語的「のような・らしい・っぽい」都是使用名詞作出形容表現的成分。這三個詞可説都持有將前接的名詞屬性抽取出之後，將那屬性付加到被形容對象上般之能力。因此本論以這點將三個詞總稱爲「屬性抽出語」。本研究是以「屬性抽出」這一觀點來記叙這三個詞的特性爲研究的目標。

「屬性抽出語」的使用可説是密切地關連到名詞的屬性問題。因此本論將名詞的意思屬性分爲兩大屬性。判斷是否是名詞指示之對象時，不可缺少的意思屬性稱爲「定義屬性」。而我們使用名詞時，所連想到的社會一般之意思屬性稱爲「prototype 屬性」。

本論以上述兩種屬性之區分爲基礎分析了「屬性抽出語」。而得到下述基礎的結論。「定義屬性」是掌握使用任何一個「屬性抽出語」時、不可缺少的重要屬性。也就是説，「屬性抽出語」使用上的選擇限制條件是，被形容對象和前接名詞之間的定義屬性的關係。而「prototype 屬性」是被利用爲作出形容意思的名詞屬性。

1　はじめに

本研究は以下の(1)a ～ c のような表現形式を研究の対象とする。

(1) a.　女のような人
　 b.　女らしい人

---

* 日語屬性抽出語「のような・らしい・っぽい」之考察－以修飾表現爲主－(黄愛玲)
** 言語文化研究科博士後期課程

c.　女っぽい人

(1)a～cは、いずれも同じ名詞を使って対象を形容する修飾表現を作り出している表現形式である。これまで、「のような・らしい・っぽい」の研究では、(1)のような用法に限って取り上げた研究はほとんど見あたらない。

「のような」の修飾表現（いわゆる比況）に関する研究は、従来から形容的に使われる名詞が持つ特性や属性と、被修飾名詞との間の関係によって説明がなされている。森山(1995)は「のような」を使った表現が表す「推量」「例示」「比況」のいずれの意味に於いても、その根底には全て「類似」という原理が存在していると説明している。『基礎日本語辞典』(森田 1989)では「概念上はイコールではないが、感覚としてはイコールである」とある。

中島(1983)は「らしい・っぽい」を「あるものの性質・様態」に関する表現として、その違いについて論じている。「らしい」については、「あるものが属している性質・様態のうちで、『あるべきもの、あると期待されている』ものを、それが有している」場合に使用されると説明している。一方、「っぽい」に対しては「いろいろなものの性質・様態に対する一般のイメージを利用し、それがそうした性質・様態、或いはそのものを目立つほどに有している」場合に使用されると説明している。同じ「らしい・っぽい」の違いに言及している研究としては、『基礎日本語辞典』に、「『～らしい』は『～っぽい』と違って、『そのものが本来持っているべき特徴を強く発揮している』状態である。『～っぽい』は『本来はそうではない事物が、そのような性質を帯びて、本来の姿と違った状態になっている』」と記されている。

以上から概括的に言うと「のような・らしい・っぽい」の使用には、名詞の属性が深く関わっていることが分かる。また、修飾成分として使っている名詞（以後、前接名詞と呼ぶ）の属性を抽出し、それを被修飾名詞（本研究では被修飾対象であるという考えから以後、被表現体と呼ぶ）に付加していく働きがあると考えられる。三つの表現が全てこの共通する働きを持つことから、三者をまとめて「属性抽出語」と呼ぶ。一方、(1)の三つの表現形式がそれぞれ異なる意味を表していることは、各々の属性抽出語には相異なった働きがあることを示している。その相違は、日本語母語話者にとっては難しいことではなく、自然に身についている認識と思われるが、日本語を外国語として学習している人にとっては、必ずしも容易なことではない。

例えば、この三つの属性抽出語が中国語に訳されるとき、これまでも、しばしば同じ「像」という訳語が使われてきた。

(2) a. 芸術家のような　→　像芸術家
　　b. 芸術家らしい　→　像芸術家
　　c. 芸術家っぽい　→　像芸術家

このことは、日本語のこの三つの表現の違いが、中国語母語話者にとっては捉えにくい表現であることを示すものであると考えられる。本研究はこの三つの「属性抽出語」の根本にある共通点と相違点を明確にすることを目標とする。

2　定義属性とプロトタイプ属性

これまでの研究から属性抽出語の共通点と相違点は、前接名詞と被表現体の持つ属性に深く関わっているものと考えられる。つまり、前接名詞と被表現体の何らかの属性が属性抽出語の選択制限や意味の違いに関わっていると考えられるのである。

名詞の意味属性の解明に努めた研究は、これまでも幾つかある。山梨(1988)は、比喩の選択違反を解明するために名詞の属性を「中核概念」と「顕現概念」とに分けた。同研究書では「オオカミのような人」を例として挙げて、以下のように比喩で使われる意味属性を考えた。

> [中核概念]：その表現の指示対象を生物学的に特徴づける部分
> [顕現概念]：その表現の指示対象のプロトタイプを特徴づける部分
> 前者の中核概念の部分は、問題の表現の指示対象に対し生物的な定義を与える部分であり、この定義に関しては例外はない。(中略)後者の顕現特性はその指示対象のプロトタイプないしは典型を規定する部分であり、その規定に関する例外も許される。この顕現特性の部分は、多分に文化・社会的な背景によって左右される。

そして、「比喩による言葉のあやの基本は、たとえる対象としてのAをBに見たて、このBの特性にもとづいて、Aを叙述する点にある。しかし、Bのすべて

の特性が、この比喩的な叙述に使われるわけではない」と述べた上で、「比喩の修辞的な叙述で重要な役割をになうのは、むしろこの意味でのプロトタイプを規定する顕現特性の部分である」と指摘している。

ここでいうプロトタイプとは、Rosch(1975)の心理学的な実験による研究結果から出た考え方である。Rosch らは同じ文化社会に属する人々は、同じ語からほぼ同じような具体例が喚起されることを発見し、語彙によって喚起される例は、語が社会によって理想化されたモデルを表すのに適した典型的な例であると考えた。そして、この社会による理想化されたモデルをプロトタイプと呼んだ。このプロトタイプは、属する言語的社会共同体によって、個々人が喚起するモデルが違ってくるため、特定のものを指し示すものではないと考えた(Rosch 1978)。

上に述べた山梨(1988)の考え方、即ち名詞に内在する属性を二種類に分けるという考え方を適用することで、属性抽出語の間に存在する共通点と相違点を明確にできるのではないかと考える。そこで、本研究ではこの二種類の属性を「定義属性」と「プロトタイプ属性」と呼び分けて属性抽出語の分析に用いることにする。まず、本研究でいう「定義属性」と「プロトタイプ属性」を「女」という名詞を例として説明することにする。「定義属性」とは、我々が名詞を使用する時、「女」という名詞が指示している対象物を規定するために必要な属性である。つまり、この名詞が指し示している対象物であるか否かを判断する上で必要不可欠となっている意味属性のことである。一方「プロトタイプ属性」とは、この「女」という名詞から我々が連想する、或いはこの名詞に対して社会的に付与された典型的な「温和な・優しい・弱々しい...」等の意味属性である。つまり、語に与えられた社会的な意味属性である。「定義属性」と「プロトタイプ属性」はそれぞれ「中核概念」と「顕現概念」と概ね対応するものである。「顕現概念」については、説明にプロトタイプを用いており、その定義は「プロトタイプ属性」とほとんど同じである。「中核概念」に関しては、「オオカミ」が具体例となっているので、生物学的という条件を挙げているが、もちろん他の具体例についてこの中核概念を考慮した場合、必ずしも生物学的であるとは限らない。

名詞の属性である「定義属性」と「プロトタイプ属性」は、実際にはその境界が必ずしも完全には明確になっていない。しかしながら、本研究では、属性抽出語と共起する名詞の相互関係を見る上で、属性抽出語を使用する際に使われる二種類の名詞属性を明確にすることが不可欠であると考え、このように定義して分類した。

3　定義属性とプロトタイプ属性による分析

3.1　肯定形

この節では属性抽出語が肯定形で現れる場合において、名詞の定義属性とプロトタイプ属性をどのように利用しているのかを分析していく。

(3) a.　私は火酒をつぎ、タバコに火をつけ、棺のなかですやすや眠っている赤ん坊や、泡の音をたてる粘膏や、餓鬼のような男たちのぺちゃんこの腹のうえで上ったり下ったりする臍のほうへもどっていく。(『夏の闇』p.122)

b.　闇のなかのぬらぬら笑う濡れた眼や、財布をとりだす白い巨大なウジ虫のような指や、唾で光った厚いくちびるや、ルンバルのうつろな激情にみちた叫喚などで、(中略)、屋根裏部屋の呪いであるはずだ。(『夏の闇』p.146)

c.　車体に鳥肌のような雨粒がつき、重くなった水玉が冬の虫みたいにゆっくりと下へ垂れていく。(『限りなく透明に近いブルー』p. 72)

(3)は「のような」を使った表現である。aは「男たち」のぺちゃんこの腹の様子を「餓鬼」という言葉を用いて表現した。この表現はただの「男たちのぺちゃんこの腹」よりもイメージが膨らみやすく、情景を更に生き生きと伝えることができる。bは「指」の様態を「ウジ虫」を用いて表現している。「ウジ虫」を使うことによって、作者は自分独自の世界を表現でき、更に「ウジ虫」の持つ不気味さを加えることもできる。cは車体に付いた雨粒を人間の肌に出る鳥肌に見立てることにより、より臨場感のある生々しい情景表現となっている。

さて、以上の(3)a ～ cの表現に使われている被表現体と前接名詞の関係を見ていくと、いずれも定義属性において同一のものではなく、全て否定的な関係にあるものが使われている。aでは被表現体「男たち」は定義属性として、まず人間であると考えられる。しかし、前接名詞「餓鬼」は“人間ではない”という定義属性を持っており、互いに否定的な関係にある。同様に、b, cにおいても「指」

と「ウジ虫」、「雨粒」と「鳥肌」のそれぞれの定義属性は否定的な関係にある。このように定義属性が否定的な関係である時、我々は「のような」を選択し使用している。

(4) a.　菊子は八人きょうだいの末っ子である。(中略)菊子は末っ子らしく育ったようだ。あまやかすというよりも、みなに気安く愛されたらしい。少しひよわいところはあった。(『山の音』p.19)
　b.　精神科の医師で同時に民俗学のジレッタントでもある三瓶(中略)三瓶の調子が三重子に対うと、急に医者らしく社交的になるのを伊吹は薄笑いしながら、きいていた、(『夏の終わり』p.24)
　c.　ことばは乱暴だが、若造りで背の高い陽子にはそうした喋りかたがぴったりだったし、むしろそのためにこそ逆に女らしくも感じられた。(『家族八景』p.50)

(4)は「らしい」を用いた表現である。aは前もって既に「菊子」が末っ子であると提示した上で、「末っ子」が持つであろう特性(プロトタイプ属性)を菊子が持ち合わせていることを強調した表現である。bも同じく「三瓶」が医者であることは周知の事実である上に、「医者」であれば社交的であろうという一般的なプロトタイプ属性をも「三瓶」は備え持っていることを表現したものである。cでも「陽子」が女性であることは既に分かっていることである。彼女の乱暴な話し方は一般的な「女」の持つプロトタイプ属性とは違ったものであるといえる。しかし、若作りで背が高い「陽子」では、却ってそのような話し方が彼女の備えているであろう「女」のプロトタイプ属性を際だたせている様子を表現したものである。このように我々は、被表現体が既に前接名詞の属性を備え持っている場合に「らしい」を使用するのである。

(5) a.　「いい年をして子供っぽいことをいってるわ。弁解にしても二流だわよ。堕ちたわね。(中略)いつまでもそこでそうやってなさい。」(『夏の闇』p.241)
　b.　「今回は、強くて女っぽい女性をイメージしています。(略)」(月刊誌『an.an』[1] インタビュー)

[1] 淀川美代子編 1995『an.an』No.959 株式会社マガジンハウス

c.　「いい女って、ありきたりな表現だけど、悪女のときもあれば、天使のようなとき、男っぽいとき、母性的なとき、と他面的な魅力を内側にいっぱい持っている人。(略)」

（月刊誌『an.an』インタビュー）

(5)は「っぽい」が使われている例である。aは被表現体の人が発した言葉が「いい年」の人としてはふさわしくなく、「子供」が発するような言葉を使用した場合を表現した文である。bは被表現体の「女性」は、社会一般に「女」に与えたプロトタイプ属性を有していることを表現したものである。cは「女」にはいろんな顔があった方が魅力的であるという考えを述べている表現である。その中の一つの顔として、時には「男」が持つと考えられているプロトタイプ属性を態度・行動に取った方がより魅力的な「女」になるという表現である。

さて、(5)a～cから「っぽい」は定義属性の関係を気にしないで使用できるものと考えられる。aとcの例では「いい年をした人」と「子供」、「女」と「男」の定義属性は否定の関係にある。反対に、bの例では被表現体が既に前接名詞の定義属性を備え持っている場合の関係にある。

ここでは各々三つの例しか挙げなかったが、前接名詞の定義属性と被表現体の定義属性の間には一般的にここで指摘したような関係が成立する。そして、この両者の定義属性の関係性が「のような・らしい・っぽい」の使用上の制約条件を構成している。つまり、我々が「属性抽出語」を使用したいとき、両者の定義属性の関係性がその選択を決定しているのである。ここでは属性関係を更に明確にするために、前接名詞をXとし、被表現体をYとして、Yの定義属性がXの定義属性の否定を含意する[2]関係((6))と、Yの定義属性がXの定義属性を含意する関係((7))との属性抽出語使用パターンの作例を見ていく。

(6) a.　あの男は、女のようだ。
　　b.　*あの男は、女らしい。
　　c.　あの男は、女っぽい。

(7) a.　*あの女は、女のようだ。

---

[2] ここでの「含意する」の意味はentailの意味である。

b.　あの女は、女らしい。
c.　あの女は、女っぽい。

(6)は、被表現体「男」を「女」という前接名詞の属性を用いて形容したいと考えた場合である。このような前接名詞「女」の定義属性(＋雌)が、被表現体「男」の定義属性の一つ(＋雄)の否定を含意している場合、「らしい」は選択制限がかかり使用することはできない。しかし、(7)の被表現体「女」を「女」という前接名詞の属性を用いて形容したいと考えた場合では、使用することが出来る。これに対し、(7)では、「のような」は選択制限に引っかかり使用するができない。「っぽい」は、(6)(7)のどちらにおいても選択制限がかからずに自由に使用できる。つまり、「っぽい」は属性関係を気にしないで使用ができるという性質を持っているのである。

3.2　否定形

前節では属性抽出語が肯定形で表れる時、「のような・らしい・っぽい」のどれを選択するか、その制約条件を構成しているのは被表現体と前接名詞との定義属性の関係であることを示した。本節では属性抽出語が否定形で表れる場合を見ていく。

(8) a.　彼が七瀬のことばに心で反論することに躍起となり、生娘らしくない七瀬の落ちつきかたにまったく気がつかないのは、彼自身はげしくとり乱しているからで、それは七瀬にとって非常に不利だった。(『家族八景』p.95)
b.　駅の隣のホテルには、ツインベッドの部屋が一つだけ空いていた。広い部屋はホテルらしくない家庭的な調度で飾られているのが、疲れた神経を和めてくれた。(『夏の終わり』p.132)
c.　可愛らしく肉を盛った桃色の小さい掌の華奢にそり返ったのがかがみこんでいる(中略)泰子らしくない蓮葉な身体つきなり手つきなりだった。(『女面』p.38)

(8)aは「生娘」である「七瀬」が取った態度は、「生娘」が取るであろうと思

われている態度とは異なり、落ち着きすぎていることを表現した文である。つまり、我々は「生娘」のプロトタイプ属性として、(8)aの描かれている場面では「七瀬」は恐がり取り乱していなければならないのに対して、「七瀬」が取った態度はそのような期待と違うものであった。そのことを描写したのがこの表現である。bはホテルであれば豪華な調度品で飾られているであろうと考える我々の期待するプロトタイプ属性とは異なって、このホテルでは家庭的な調度で飾られていることを説明した表現である。そして、cは小説の登場人物「泰子」が、その性格や性質からすれば取るはずのない行動パターンを取ったことを描いた情景である。(8)a～cから、「らしくない」とは、通常期待される状態・情景でない時に使われることが分かる。また、これらの例から否定形の属性抽出語が否定しているのはプロトタイプ属性だけであることも分かる。なぜならば、もし、否定が定義属性にまでかかっているのであれば、(8)a～cの用例は各々被表現体が、「生娘」じゃない、「ホテル」ではない、「泰子」じゃなく他のものとならなければならない。しかし、そうならないことは、否定が定義属性にまで否定していないことを証明している。本研究では電子化された九つの文学作品[3]から検索を行ったが、その九作品の中からは「のような・っぽい」の否定形の使用例を取り出すことは出来なかった。ここでは「らしい」の否定形の例から類推して、属性抽出語の否定形として文法的に容認できるパターンが存在すると考え、肯定形と同じく対照的な作例を用いて個々の属性抽出語を分析していくことにする。以下の作例(9)a～cはYの定義属性がXの定義属性の否定を含意する関係の場合であり、(10)a～cはYの定義属性がXの定義属性を含意する関係の場合である。

(9) a.　佐藤先生は、学生のようではない。
　　b.　*佐藤先生は、学生らしくない。
　　c.　佐藤先生は、学生っぽくない。
(10) a.　佐藤先生は、先生のようではない。
　　b.　佐藤先生は、先生らしくない。
　　c.　佐藤先生は、先生っぽくない。

3) 本研究で使用した資料は本研究科研究生仲田陽子さんの作成による電子化テキストである。[安部公房 1981『砂の女』新潮社／川端康成 1957『山の音』新潮社／瀬戸内晴海 1966『夏の終わり』新潮社／円地文子 1966『女面』新潮社／筒井康隆 1975『家族八景』新潮社／開高健 1983『夏の闇』新潮社／有吉佐和子 1982『恍惚の人』新潮社／村上龍 1976『限りなく透明に近いブルー』新潮社／山本道子 1977『ベティさんの庭』新潮社]

(9)の用法ではa, cが正文となる。なぜならば、否定する範囲がプロトタイプ属性のみであるならば、a, cの「のようではない」と「っぽくない」では、定義属性の否定を含意している前接名詞「学生」から、プロトタイプ属性を付加する可能性がある。そして、その付加されたプロトタイプ属性を否定するという意味での使用であれば、(9)a, cは容認できるからである。つまり、(9)a, cはそれぞれ「佐藤先生は、学生のようだ」、「佐藤先生は、学生っぽい」の発話を否定するために発話された表現である。前述の(8)の分析での結果と同じく「らしくない」は(9)のような関係においては使用することができない。その理由は「らしい」が前接名詞の定義属性を含意する関係でしか使用できないことから、自ずと推測できる。「らしい」とは、被表現体の定義属性の否定を含意する関係にある前接名詞から、新たなプロトタイプ属性を付加されることはあり得ない。ゆえに、(9)bのような関係は新たに付加されたプロトタイプ属性がないために否定するものがなく、使用することができない。以上から、属性抽出語の否定形の否定する範囲は、前接名詞のプロトタイプ属性のみであることが分かる。また、そのプロトタイプ属性は被表現体が持つと前提しているものである。よって、(10)の用法とは、被表現体が元々所持しているプロトタイプ属性を否定している表現であると考えられ、全てが正文となると判断出来る。(10)aについては、従来それが正文であるか非文であるかという点について、意見がわかれていたが、全く容認されない用法ではないという結果を得られた。

3.3 まとめ

本研究では「のような・らしい・っぽい」の共通点と相違点を体系的に解明しようとしてきた。そして、属性抽出という一つの観点に立って、接続する名詞の属性を定義属性とプロトタイプ属性とに分けることによって、その根本的な共通点と相違点を明確にすることができた。

共通点

前接名詞の属性を抽出使用している点は全く同じである。選択制限を決定しているのは「定義属性」であり、形容的な意味として使用されているのは「プロトタイプ属性」であると言える。

相違点

a.「のような」: 肯定形では前接名詞の定義属性が被表現体の定義属性の一つ以上の否定を含意しているときしか使用できないが、否定形になると、その否定がプロトタイプ属性しか否定しないため、被表現体の定義属性を含意する名詞でも使用することができるようになる。

b.「らしい」: 肯定形でも否定形でも被表現体の定義属性を含意する名詞しか使用できない。つまり、前接名詞の属性が既に前提(presuppose)されている場合においてのみ使用することができる。

c.「っぽい」: 使用名詞が被表現体の定義属性を含意するか否かは問題にしていない。色彩名詞のように定義属性が元々明確でない語に対する使用が目立って多い。文学作品では使用度が他に比べて著しく低い。

以上に述べたように、「のような・らしい・っぽい」を属性抽出語とした本研究の観点から見ていけば、その根本にある共通点と相違点が明確になる。(表1)。

検索を行った文学作品から「のようではない・っぽくない」の例は一つも取り出すことができなかった。このことについては更に多くの作品を分析する必要がある。しかしながら、この結果から我々は、「否定形」とは、我々が必ず持つであろうと期待したプロトタイプ属性を被表現体が持っていなかった場合にだけ、特に表現の必要性を感じることの表れであるのではないかと考える。

従来「っぽい」は「らしい」と比べてマイナス評価を与えられやすい、またはマイナス評価の語であると言われてきた（森田 1989、三浦・花岡 1994)。それは、「っぽい」が定義属性を含意しないで使用できるためではないかと考える。我々が物事を表現するとき、そのものが所有すべき属性を有していることはプラス評価であると考え、良い評価を与えているのに対して、そのものが有すべき属性であるかどうか分からないとき、我々はそれにマイナスの評価を下し、良くない評価を与えてしまいがちなのである。このことから、「っぽい」自体にはマイナスの意味はないと言えると考える。

表1：定義属性とプロトタイプ属性による関係

	のような		らしい		っぽい	
	肯定形	否定形	肯定形	否定形	肯定形	否定形
定義属性	−	0	+	+	0	0
プロトタイプ属性	+	−	+	−	+	−

（＋：Yの属性がXの属性を含意する。　－：Yの属性がXの属性の否定を含意する。
0：Yの属性がXの属性を含意しない。）

4　終わりに

本研究では、「のような・らしい・っぽい」の前に名詞が来て形容的な修飾表現として使用される場合において、三つの言語形式の共通点と相違点を明示しようと試みた。分析手法として名詞の意味属性を定義属性とプロトタイプ属性とに分けた。今後は、本研究で論及しなかった推量と例示の用法の違いもこの「属性抽出」という観点から明示することが出来るのではないかと考え、これらの点については、稿を改めて分析を行うこととする。

参考文献

三浦昭・花岡直美編 1994 『日本語語彙再入門』

黄愛玲 1996 『属性抽出語の一考察 －名詞＋{のような／みたいな／らしい／っぽい}－』 大阪大学大学院言語文化研究科修士学位論文

Lakoff, G. 1987 *Woman, Fire, and Dangerous Things : What Categories Reveal about the Mind.* The University of Chicago press（池上嘉彦，河上誓作（訳）1993『認知意味論』紀伊国屋書店）

森田良行 1989『基礎日本語辞典』角川書店

森山卓朗 1995「推量・比喩比況・例示 【よう／みたい】の多義性をめぐって」宮地祐・敦子先生古稀記念論集刊行会編『日本語の研究』 明治書院

中島由美 1983「～ラシイ・～ッポイ・～クサイ」国広哲弥編『意味分析』東京大学文学部

Rosch, E. 1975 "Cognitive representations of semantic categories." *Journal of*

Experimental Psychology : General 104, p192-p233
— 1978 "Principles of Categorization" In E. Rosch and B.B. Lloyd (Eds) *Cognition and Categorization*. 27-48 University of California, Berkeley
山梨正明 1988『比喩と理解』東京大学出版会